

中に“FUKUSHIMA”が“原子力発電所事故”を指して世界的に使われるようになってしまったことに對して、原子力工学の専門家としての複雑な思いも感じられます。

第4章の「放射線の生体影響について」では、現在、科学的に知られている低線量被ばくの説明とリスクが話されています。多くの方が最も関心を持っている項目が“被ばく影響”であることが、その質疑応答からみてとれます。

第5章と第6章は、若干の時間をおいて開催されたものです。紙面の都合で詳細は割愛させていただきますが、第6章に述べられている「『人は忘れる』の原則を忘れていた」という記述は、正に今我々に突き付けられた、大切な教訓ではないかと思えます。さらに、文系理系と別れてしまう高等教育の問題点にまで踏み込んだ議論は、一読の価値があると思えます。

(古田悦子 お茶の水女子大学)

(ISBN978-4-905194-35-4, B 6 判 300 頁, 定価本体 1,800 円, 富山房インターナショナル, ☎03-3291-2578, 2012 年)

やっかいな放射線と向き合って 暮らしていくための基礎知識

田崎晴明 著

Web 上での公開を経て朝日出版から出版されることになった本書では、「はじめに」で、「これから先の長い年月、『やっかいな放射線』としっかり向き合いながら暮らしていかなければならない。そのためには、みんなの『常識の基盤』を広

げて、放射線に関わる事柄もカバーできるようにする必要が」と、本書執筆の姿勢が語られる。

事故直後からしばらくの間は、このような姿勢で

書かれたものでも、また発言された内容であっても、一般の人々の多くにとって、受け入れにくかったであろう。そのことは著者も指摘している。

今、福島第一原子力発電所の事故から1年半が経過した。まだ避難生活を余儀なくされている人もいる。避難指示区域の見直しが決定され、居住制限区域などの指定も進み始めた一方、昨年度の米の放射性セシウムの測定結果から、今年度になって水田作付け制限になった地区もある。問題は全く収束しているとは言えない。しかし、事故後最初の1年に比べると福島での生活の混乱は少なくなっているように見える。不安がゼロになったわけではないが、根拠のない過大な不安は減ってきただろう。また、除染に対する過剰な期待は減って失望をもたらした。これもまた現実に向き合う姿勢に移りつつあるように思われる。このようなフェーズでは知識の積み重ねに基づく冷静な判断へと向かう人が増えているであろう。今、本書に接して腑に落ちると感じる人が多いのではないだろうか。

私の職場である福島大学では、福島第一原発事故後緊急時の対応として専門分野にかかわらず教員有志が、他所から提供・寄贈された装置で、放射線量測定とその結果のマッピングを始めた。さらに、時間経過とともに、本来の得意分野に加えて放射能を視野に入れた専門的研究や実践も行われるようになるなど、多くの教員が原発事故に関連して様々な活動を行ってきた。他方、地元住民でもある我々は、住民の不安、特に小さい子供を持つ親の不安に向き合うことも避けては通れない。もちろん、原発事故直後からしばらくの間は、私たち自身も自分や自分に身近な人々の健康について少なからぬ不安があった。測定も行いつつ、その測定値がヒトに対して持つ意味というのを文献から調べることが、もともと放射線の人体への影響について詳細に知っているとは言えない私の不安を解消するための方法だった。

とはいえ、環境科学の一分野を専門とする私にとっては、地元で依頼された講演等で環境観測事実やフィールド科学の範囲でその解釈については語る事ができても、ヒトの健康への影響について歯切れよく語るのは困難であった。本書でもやはり分からないことは分からないと記されているが、その分からない中でどの程度の危険があるかという考え方や



注意すべき事柄が的確にかつ親身に解説されており、ヒトの健康への影響について説明するときの説明方法として参考になるだろう。

第1章で本書執筆の動機を述べ、第2章で放射性物質と放射線についての入門的説明がある。第2章の終節は「放射線に常識は通用しない」とし、“常識の基盤”共有拡大のための読者の努力を促している。第3章は原子力発電の原理と今回の事故、そして現在も進行する冷却作業について記されている。ここまでが本文全体120ページのうち概ね3分の1を占める。そして第4章「放射線の被曝と健康への影響」はそれだけで本文全体の3分の1で、「被曝によってどれだけ癌が増えるか」、「確率的におきる出来事についての考え方」、「子供の被曝は別格に考える」等の節が含まれ、地元住民の不安に寄り添った内容になっている。第5章「放射性セシウムによる地面の汚染」及び第6章「放射性セシウムによる食品の汚染」では、被曝線量についての考え方を計算例を挙げながら解説している。そして、第7章「さいごに」では、“健康を害する人が目に見えて増えるということはないだろう”という著者の考えを述べる一方、“議論は続くだろう”あるいは“簡単な答えはない”として、情報を読み解くということを促し、自分なりに方針を決めて進んでいくことが求められると読者に語りかけている。本書から知識を吸収することは、これらの大いなる助けになるだろう。

(難波謙二 福島大学)

(URL <http://www.gakushuin.ac.jp/~881791/radbookbasic/>)

(ISBN978-4-255-00676-5, B5判 160頁, 定価本体1,000円, 朝日出版社, 2012年10月発行予定)

※上記URLの電子ファイルは、書籍発行後も引き続き無料公開される。いずれも内容は同じ。

